

4-1-6-3 脳神経外科

1. 国立成育医療センター脳神経外科の活動と特色

国立成育医療センター設立とともに歩み始めた脳神経外科も今年度(2004年)で3年目となった。脳神経外科における小児脳神経外科という専門分野の立ち上げから、基礎固めともいえる時期になってきていると思われるが、今年度も小児脳神経外科におけるエキスパートとして小児脳神経外科疾患一般に取り組んできた。同時に、これからの小児神経外科を担う次代の人材育成という点でも、徐々にではあるが着実に成果を上げることができつつあるのではないかと考えている。これからも、小児神経外科を希望する若手脳神経外科医に出身・所属と関係なく研修できる環境を提供していく予定でいる。

小児脳神経外科における手術適応、術式の選択については単に医学的側面からのみでなく、必要に応じて社会的側面も考慮して判断するようにしている。具体的には、治療していくにあたり家族の納得を得るために段階的に手術を行う、あるいは病変の完全治癒より初回手術にあたっては機能温存を重視するなどである。手術にあたっては小児であっても可能な限り術中神経生理学的手技を施行し手術時の神経機能温存に努めている(年間手術症例数の約30%に施行)。とりわけ運動誘発電位を用いた運動機能温存、球海綿体反射を用いた排尿機能温存に関しては他の追随を許さない実績を挙げていると思われる。小児の成長という観点も可能な限り手術術式に反映させ、水頭症治療においては神経内視鏡治療、あるいは内シャント術を用いた治療を脳室腹腔シャント術の代わりに可能な限り実施している。小児における機能的疾患として、脳性麻痺小児を中心とする痙縮に対する機能的脊髄後根切断術は他分野からも全国的に注目され国内多方面からの患者を受け入れている。また、昨年度からはてんかん外科への取り組みも始まり、今年度は硬膜下電極接地、焦点切除術を神経内科と共同で成功させることができた。今後の発展が期待されている。

歴史の浅い脳神経外科であるが、上述の機能的脊髄後根切断術の他にも胎児水頭症、脊髄脂肪腫、小児頭蓋頸椎移行部病変、神経内視鏡手術に関しては国内でも有数の症例数を経験するようになってきた。新生児・乳幼児症例が多い点に関してはこの3年間の一貫した特徴であるが、ナショナルセンターの特徴を生かし難易度の高い手術に対し今後も一貫して積極的に取り組んでいきたいと考えている。

2. 診療及び研究活動

2.1 診療体制

脳神経外科の診療は医長1、医員1、研修医1の3名で手術・病棟・外来をこなしている。手術は月曜、水曜、金曜を中心に行っている。緊急手術に関しては麻酔科、手術室の協力の元に随時行っている。外来は火曜、木曜であるが1回の受診患者数が増加しており専門外来の増設など含め検討中である。

2.2 2004年度手術症例

脳神経外科における2004年4月から2005年3月までの総手術件数は185件であった。各手術手技の詳細を以下に示す。

水頭症	67
VP/SP シャント(新設)	22
VP/SP シャント(再建)	8
神経内視鏡手術	6
内シャント手術	5
その他(髄液リザーバー設置、シャント抜去など)	26

先天奇形	56	
二分頭蓋		6
脊髄髄膜瘤		3
脊髄脂肪腫(脂肪脊髄髄膜瘤など含む)		17
脊髄係留		3
頭蓋骨縫合早期癒合症		10
くも膜嚢胞		4
頭蓋頸椎移行部病変		3
その他		10
機能的疾患	18	
痙直型脳性麻痺/痙縮		
機能的脊髄後根切断術		16
てんかん		
硬膜下電極設置術		1
焦点切除術		1
腫瘍	16	
脳腫瘍		
テント上		10
テント下		2
脊髄腫瘍		1
頭蓋骨腫瘍		3
血管障害	7	
もやもや/類もやもや病		4
頭蓋内/脳室内出血		3
外傷	9	
硬膜下血腫/硬膜下液貯留		8
頭蓋骨骨折(陥没骨折など)		1
その他	18	
総計	191	

3. 研修会・講演会

臨床小児神経外科懇話会 約3ヵ月毎に開催

Case conference with Dr. McComb (May 29, 2004)

Head, Division of Neurosurgery, Los Angeles Children's Hospital

Professor of Neurological Surgery, University of South California School of Medicine.